

7. 高圧酸素療法導入以後の突発性難聴の統計的観察

瀧口哲也 山崎芳文 伊藤真人
土定建夫 山本 憲 上出文博
滝元 徹 古川 亙 宮崎為夫
梅田良三

(金沢大学医学部耳鼻咽喉科)

昭和57年以後、当科における突発性難聴の治療は、星状神経節ブロック(SGB)及び高圧酸素療法(OHP)を中心に行っている。OHP導入以後の6年間の突発性難聴の統計的観察を行った。

【対象】昭和57年1月から昭和62年12月までの6年間に厚生省突発性難聴研究班の診断規準に該当し、当科にて入院加療を行った患者は209名であった。このうち発症14日以内に当科を初診した168名を観察の対象にした。

【患者数の推移】昭和57年には28名であった。以後58年27名、59年27名、60年20名、61年32名、62年34名と徐々に増加している。

【性別及び年齢】男性84名、女性82名であり、男性、女性とも40歳代を中心に30～50歳代で最も多くみられた。

【患側】右耳89名、左耳78名、両耳1名であった。

【治療方法】ほぼ全例にビタミン剤、ステロイドが投与された。SGBを行いOHPを行わなかった群(S+O-群)は86名、SGBとOHPを併用した群、(S+O+群)は76名、SGBは行わずOHPを行った群(S-O+群)は3名、SGB、OHPともに行わなかった群(S-O-群)は3名であった。

なお本院における高圧酸素治療室はone man chamberであり、2ATAで50分間持続でOHPを行った。治療方針はSGBを基本とし予後不良例についてはOHPを併用した。

【治療成績】聴力回復の判定は研究班の判定規準に従った。全体の成績は治癒31名、著明回復55名、軽度回復50名、不変32名であった。このうちS+O-群の成績は治癒27名、著明回復30名、軽度回復20名、不変9名であった。これに対し予後不良と思われOHPを併用したS+O+群の成績は治癒3名、著明回復23名、軽度回復30名、不変20名であり比較的良い結果を得た。

8. 突発性難聴に対する高気圧酸素治療時の聴覚性脳幹反応の変化について

高良英一 湯佐祚子 當山貴子
野原 敦

(琉球大学医学部附属病院高気圧治療部)

突発性難聴の治療効果の判定は主としてオーディオグラムによって行われてきた。今回われわれはOHP治療前、中、後の聴覚性脳幹反応(ABR)を測定し、OHPの治療効果をABRの変化と対比較検討し、若干の知見を得たので報告する。

【対象】当院耳鼻科にて突発性難聴と診断された22例(男性12例、女性10例)で年齢は7～71歳、平均40.4歳である。

【方法】治療は2ATAO₂、75分のOHPと薬物療法としてOHP中にLMD点滴静注と共にATP、ステロイド、PGE₁を与えた。ABRはOHP開始前、中、後に測定した。音刺激は患者の聴取可能なdBで行った。治療効果判定は、厚生省特定疾患突発性難聴調査研究班の判定基準により行い、ABRと比較検討した。ABRは主としてI-V波の出現に注目し、波が出現した場合はその潜時の変化についても分析した。

【結果】治癒6例、著明回復8例、回復2例、不変6例である。著明回復以上の例は14/22例(64%)である。ABRの変化はI、III、V波を中心に分析した。治癒群6例中5例にI波はOHP開始前より出現しており他1例は治療中出現した。著明回復群では、全例において治療前にI波の出現はないが、治療中5例(63%)に3～14日以内(平均8.4日)にI波の出現がみられた。内2例は経過と共に潜時の短縮がみられた。回復群、不変群の計8例中OHP開始前にI波が出現する例は1例のみで、また経過中にI波が出現したのは2例である。V波、III波についても同様の傾向がみられた。

【結論】突発性難聴のうちOHPの治療効果が期待できる症例は、ABRでみるかぎり治療前にI波が認められるか、治療中にI波が出現する例である。ABRの測定はOHPの治療予後を比較的早期に推測することが可能であると考えられる。